

# 体験的漢字教育論

水口 芳明

## I 文字を読むことと書くことの分離

大阪教育大学平野分校の附属幼稚園で、国立大学の幼児教育の研究会が行われた時、香川大学からは私が参加した。その折現在の小学校は読みと書きとを同時に教え、それが文字教育といえ、必ず読み書きを同時に教えなければならないと、一般に考えられている傾向がある。然し読みは早くから覚える機会があるだろうし、その時点で書きを教える必要はない。殊に幼児教育においてはそうである。以上のような私の見解に対し、研究会に参加していた国語学の大学教授は共鳴してくれた。もう20数年前のことである。

読み書き分離論は、私だけの主張するものでなく、<sup>1)</sup> 読み書き並行論との間に論争が展開される。第9期国語審議会の総会でも両論は論争された。<sup>2)</sup> 西島芳二委員長(元朝日新聞論説顧問)は、「漢字は読み書きを同時に教えることが、学習効果をあげる方法だ。正確な書き方を覚えてこそ完全に習得できる。だから小学校では読み書きを並行させ、中学では読みを先行させるもよい」と主張。西尾実委員(法大名誉教授)は、「あたしたちの教育上の経験からして、小学校の低学年では、読み書きを並行して指導しなければ、正確に習得できない。漢字の知識は、一字ずつ覚えていくものではなく、言葉や文章として覚えてこそ身につく」と強調。これに対し阿部吉雄委員は、「読んだ字は必ず書けるようにするという明治以来の教育方針には疑問がある。漢字を書くのは大きな負擔だが、読むのはわりにたやすい。そこで書くのはあと回しにして、まず読みの指導をしたらどうか」と、幼稚園児に1,000字をたやすく読めるようにした実例<sup>3)</sup>を引いて反論した。この両論に対し、西原慶一委員(日本女子大講師)は、「明治19年に当時の森有礼文相が、読み書き並行の方針を定めてから、この方式が小、中学校の教育のなかに定着した。国語教育の根本にかかわることなので、じっくり時間をかけて検討することが必要だ」と主張した。然し私は、日高第四郎委員(学習院女子短大学長)が、「幼稚園の子どもは、テレビをみて、だれも教えないのに漢字を覚える。漢字はもはや学校で教えるだけのものではない。テレビなどが漢字を学ぶ教育環境をつくっている事実に向け、現代にふさわしい指導法を考えるべきではないか」という提案をしているが、それに賛成するものである。

今頃の幼稚園児は、テレビに出てくる文字を自然に覚えている。「終」という字などは自然に覚えてしまう。「宇宙」という字だってテレビの題から自然に覚えてしまう。もちろん書く必要はない。

これも20年も前のことだが、香川大学教育学部の附属坂出小学校の特殊学級やその後身の養護学校に、よく参観にいった時に、精神薄弱児が漢字を書く場合、筆順を無視して字を書くというより、字を作るのである。出来上ったものは漢字として読めるのである。大体筆順などの中には、現在では無視して了ってよいものがある。例えば右と左である。左は横棒を書いて斜線を書く。右はその逆に斜線を書いてから横棒を書く。そんな筆順を覚えさす必要もないし、現実にどれ程の人が正確な筆順で書いているだろうか。少々筆順が違っても、出来上ったものを、字として読めればよいという、おおらかな気持ちでよいと私は思う。

当時既に邦文タイプライターの中にも、打つ字が左文字にならずに、普通の字の通りに読めるものが出来ていた。私は精神薄弱児は字を読めさえすれば、タイプライターで文章が表現出来る。ただ簡単なタイプライター、家庭で容易に購入出来るタイプライターが出来ればよい。そういう日が必ず来ることを主張していた。

ところがこの頃は、ワープロの時代になって来た。読めさえすれば字を打つことが出来る。同音異義の言葉を区別できればよくなった。ただ値段が高くて、家庭や個人にとっては高嶺の花である。高値の花といった方が、むしろ適切かも知れない。然し量産により、また多目的の機能でなく、単に文章を打つだけのもの、そして日常の表現だけ出来るワープロが出現すれば、これは解決出来ると考えられる。いずれにしても手書きを必要としない時代が来ると私は思う。筆順など問題でなくなってしまう時代が来る。

## II 就学前の文字指導

（小学校に入学する前に、文字指導をした方がよいか、しない方がよいかとなると、当然賛成派と反対派が出てくる。<sup>4</sup>

賛成派の水野茂一氏（東京こども教育センター教室長）は、文部省による学校教育の基準を基にして子供の教育を考えるのではなく、子供の現実から教育を考えると、就学前の文字指導はすべきであるという。それに対して川上和美氏（東京和光学園小学校主事）は、単に知識を覚えることが必要だろうか、幼児期に必要なのは、自主性や生活意欲、能動性、人間関係、自分のことを自分で管理する能力の方が大切であるという。

子供の父母にも当然賛成派と反対派とがある。<sup>5</sup>そして父母の8割までが賛成派であるという。自分の名前が書けるだけでよいと学校側がいったからそうしたら、他の子供はみな字が読める。子供は自分は駄目だと忽ち自信を失ってしまった。そして親もしまったと思った。学校の先生も、立て前で小学校入学前は字を知らなくてよいという。然しそれではついていけない子、落ちこぼれになる子ができると親は心配する。そして教えていてよかったと安堵する。勿論子供を自然のままにしていたが、小学校にいらっていると文字を読めたり、書けるようになって学校に感謝するという親もおる。子供の個人差によって大きく違いますが、私は今の子供は、学習の基準をきめた時より、よりよい成熟をしている。昔の基準を立て前にするより、平仮名ぐらい知っている方がよいですよという先生が、子供の差を少なくして良い教育ができるのではないかと思う。

小学校の先生の中には、小学校の教育が基準であって入学前にそれ以上になっているのは間違い、迷惑と考えるものもおる。時代遅れの基準にしがみついて、子供の発達を考えることが出来ないのは、気の毒であると思うものである。

## III 表意文字としての漢字

漢字は表音文字でなく、表意文字である。従って「き」と書いたのでは区別がつかないが、「黄」「木」と書けば、字を見ただけで意味がわかる。「あか」では「赤」「垢」の区別ができない。まして「闊伽」など考え及ばないであろう。「柿」と「垣」だってそうである。<sup>6</sup>

すると漢字は字数が多すぎるという反論が出てくるであろう。欧米の字は、26のアルファベットで表わされる。英文タイプライターは、簡単な機械で十分で、欧米語は容易に文章になるとい

う。単語の構成字は26字であろうが、単語は何万とある。英語などには、発音しないサイレントの字が沢山あって、英語国民の子供は、スペリングに悩まされると昔読んだことがある。<sup>8</sup>日本人のように年齢がいったから、目で文字を発音と同時に習うものより、音の言葉から字を書くようになる英語国民の方が、綴りには苦勞するようである。従って構成字が26字だから、欧米語がやさしく、数の多い漢字が難しいとは、簡単に断言できないと思う。



日本には表意文字の漢字の他に、表音文字としての平仮名、片仮名がある。そして現在小学校では平仮名から教える。文章も平仮名で書かせる。そして教育漢字を習うに従って、平仮名と漢字に変えさせる。漢字教育論者は、一度平仮名に書くから、漢字まじりの文章が、却く書けないと歎げく。<sup>9</sup>

この頃の学生は、漢字を知らない。随分と多くの当て字を書く。表意文字の漢字を、表音文字として用いるとしか思えない。萬葉仮名じゃあるまいしと、私は常日頃から思っている。そしてその原因は、小さい時に表意文字としての漢字をしっかりと教えなかったからだとは私は考える。

#### IV 画数の多少と漢字の難易度

漢字教育論者は、画数の少ない漢字が易しく、画数の多い漢字が難しいとは限らないと主張する。<sup>10</sup>そしてよく例に出すのが、鳩と鳥と九とである。画数からいえば勿論鳩が多く九が一番少ない。また鳩は鳥と九とでできている。然し子供が一番覚え易いのは鳩であって、九ではないという。鳩、鳥、九の順序で段々覚えにくくなる。画数の多さとは逆比例して、九が一番覚えにくくなる。<sup>11</sup>

その説明として、鳩は具体的である。鳥になると、鳩を含めているいろいろの鳥をすべて含めて鳥になるから、抽象的である。さらに九になると、具体的なものは一つもない。全く抽象的なものである。だから具体的なものから、抽象的なものへと難しくなっていくので、画数の多少によるのではない。この点は、新聞にも報道されたし、テレビにも放映されたし、私たちの経験でも全く同じであった。

かって私は Goldstein の抽象性、具体性の問題を研究したが、その折 Stick Testを行なった。長短の棒をいくつか使って、モデルをみせて模倣させ、或は記憶によって作らせるのである。棒の数が多いたのが難しいのではなく、棒の数の少ないのが難しいのである。 8本の棒(長い棒6本、中の棒1本、短い棒1本)を用いた上記のものより、 この2本の棒(長い棒=2本の棒)の方が難しいのである。初めの方は戸口のある家であり、具体的である。次の図は方向、角度というその人には何の関係もない抽象的なものであるからである。8本の棒を用いる方が、2本の棒を用いるものより易しいのである。同じEという4本の棒を用いる場合でも英語のEであると知っている幼児には何でもないが、方向という抽象的なものとして捕えている幼児にとっては、正確な再生は困難であった。<sup>12</sup>この点漢字の画数と棒の多少とは、その多少に左右されるのではなくて、具体度、抽象度に支配されるのである。

この点を漢字教育論者は、ずっぺらぼうの顔よりも、目鼻のある顔の方をよく覚えるし、さらに皺があったり、ほくろのあった方をよく覚えると説明する。<sup>13</sup>つまり具体的になればなる程覚え易いし、画数の多い方が覚え易いと主張するのである。

## V 象形文字としての漢字、合成文字としての漢字

漢字は覚えにくいという論に対して、象形文字としての漢字は覚え易い。山が三つの山の形から、川が水の流から、同じく水も水の流れから出来た。口、火、日、木、田、みな象形文字である。<sup>14</sup> この漢字の成立を映画かビデオテープで見せると、幼児でも容易に覚える。

漢字は合成された文字が多い。木から林、森が出来る。覚え易い。松、杉、桧はみな木篇である。板、柱、根、棒、橋、みな木篇である。池、河、流、湖、海、浅、深、みな水と関係がある。ある外人は漢字を要素に分けて分析する。そして漢字は易しいという。

幼児が人の姓を覚えようとする時、「やまだ」は難しい。山田の方がやさしい。山も田も象形文字であり、二字しかないから覚えやすい。私の姓の「水口」も、象形文字であり、「みずぐち」の四字に較べれば覚え易い。

私は高松東幼稚園において、幼児の姓名を漢字で書かした。平仮名の方が易しいと考えるのは迷信である。幼児は漢字を字と考える必要はない。一種の符号である。ゲシタルトである。

これ以前に高松幼稚園を開園する時、貼紙を業者が売り尽くして一枚もない。貼紙とは子供の姓名を、犬や象や花に置き換えるのである。漢字教育を行なっていなかったので、平仮名で姓名を書いた。<sup>15</sup> 「みき」「みよし」「みずぐち」を一つのゲシタルトとみなす。幼児は長さの差で区別がつく。そのうち共通の「み」に気がつき、更に字の一つ一つに分析すると考えた。これは成功した。漢字の場合も、「山田」「山口」の方が「やまだ」「やまぐち」より簡単だし、形で区別すればよいのだから、漢字の方が覚え易い。「三木」「三田」だって同様である。下駄箱に書かれた漢字で、友達の名前を覚え、やがて友だちの姓を読み上げて、帳面を配ることができるようになる。<sup>16</sup>

## VI 高松東幼稚園の漢字教育

四国新聞で大阪の文化幼稚園が石井式漢字教育をしているのを見て、同幼稚園を訪ねて、宮地武久事務長からいろいろ聞いた。さらに同じ大阪の小路幼稚園も、石井式漢字教育をしているので、同園も見学にいき、井上文克園長から種々示唆を得て、昭和44年5月から漢字教育を始めた。<sup>18</sup> 昭和44年7月9日には、東京から石井勲先生を招いて漢字教育の講演をして戴いた。さらに大阪の小路幼稚園の井上文克先生に、漢字教育について講演して戴いたのが、昭和49年4月24日のことであった。<sup>19</sup>

石井氏は漢字教育をするのでない。漢字で教育するのでであると、主張してられる。<sup>20</sup> お伽話をして、そこに登場するものを漢字で書いていく。耳だけで話を聞くのではなく、目と耳とで話を聞くのである。

さらに漢字を自然に覚えさす環境作りとしては、「柱」「机」「窓」「松」「杉」とか目にふれるものに、名札をつけておく。遊びの中で覚えさすのには、漢字のカルタ取りなどをさせる。或はフラッシュカードを使って、繰り返さす方法なども用いられる。

幼児は漢字を覚えさせれば、驚く程多くを覚える。東幼稚園では、何年間も調査しているから間違はない。東幼稚園の村尾先生は、幼稚園児が、3年間で700や800の漢字を覚えるのは何でもないといっている。<sup>20</sup> 然し私は多くの漢字を覚えるのが、良いとは必ずしも考えない。子供は漢字に限らず覚えさせれば、大人が驚く程覚える。だが量が多い程良いといえないと思う。

だからといって反対に、子供の時覚えさすのは、悪いとも考えない。東幼稚園では、知能検査を沢山していた。6種類の知能検査だけでなく、音楽テストもしたし、読書レディネステストもした。親たちに対して、親子関係診断テストもしたし、親たちや先生たちを使って社会成熟テストもした。

学者の中には、知能テストを幼児にするのは、却って幼児の発達の妨げになると考える人もおる。幼児は遊びによって発達するからであり、遊びを妨げてはいけないという。私の経験でいえば、幼児は知能検査をするのが好きである。彼らは遊びとして、知能検査をしているのである。遊びを身体を使う遊びに限る必要はない。乳児が手や指を動かしてあかずに眺めているのは、発達に役立っている。そういう発達段階にあるからである。知能だって発達していく時は、その発達をためしたい。彼らは遊びとして知能テストをして、知能の発達をためしており、楽しんでるのである。遊びを固定化し、狭く考える必要はない。固定的形式的思考からは、発展は出て来ない。

知能テストの場合と同様に、漢字教育の場合も弊害を齎らすと考える必要はない。だが行き過ぎはいましめなければならない。小路幼稚園が漢詩や漢文をとりあげるのには賛成できない。<sup>21</sup> 私も子供にやらせれば、覚えることは疑わない。然しする必要はない。私も小学校へいく前に、当時片仮名から文字教育をしていたが、片仮名は読み書きができた。その頃父が私に「大学」を教えてくれた。註を含めてである。昔流に素読だけで、意味は関係ない。今だってその一部は暗誦できる。だがやはり必要ないと考える。漢字に親しみをもち、漢字を恐れ毛嫌いすることがなければよい。私は漢字教育はそれでよいと思っている。多くを覚えさす必要はない。親しみをもちさえすればよい。

## VII 漢字教育と小学校の教科書漢字

漢字教育をする時、専門に作られた雑誌をテキストとして使用していることが多い。昔の物語を漢字交り文で書いている絵本である。昔の物語を取りあげている関係上、そこで使われている漢字の言葉が、今日使われていないようなものが多くなっていった。私はやはり現代によく使われている言葉を漢字で現わす必要があると考える。

一色八郎氏は、現在小学校で使っている漢字が多く使われる必要があると主張する。出来れば教科書に出てくる順序が望ましいという。<sup>22</sup> 漢字教育だからといって、勝手な漢字の出し方をするのはよくない。勿論現在の教科書の文字とその出し方が絶対に正しく、それを墨守すべきであるというのではない。<sup>23</sup> 改めるべきは改めてよいと思う。私は一色八郎氏の所説に賛成である。

そういう主張もとり入れられて、漢字雑誌が、改良されていっていることは嬉しいし、当事者達の努力を高く買うものである。

## VIII やっぱり書く

幼児たちは漢字を書きたがる。私は幼稚園では、読めさえすればよいので、読みと書きの分離を主張するものであることは既に書いた。

読みと書きの分離を主張するもう一つの理由は、幼稚園で読みも書きも出来てしまえば、幼稚園教育と何の連絡もない現状の小学校に進んだ時、文字教育に新鮮さが無い。慢心が出てくる。

そうすると油断大敵、先に進んでいた兎が何時の間にか、後の亀に追い越されることもあるかもしれない。そういうことを慮って、書くことを止めてある。

然しそう理屈通りにいかない。文字を読めるようになった幼児は、字を書こうとする。書くことに興味を覚えて、出鱈目の筆順で書く。そんな筆順など自然になおってしまうという人もあるが、私は誤った筆順は後々種々の弊害を生じさす。そこで最少の筆順を教える。筆順というより、文字の書き方の自然の流れを教える。縦の棒は上から下に書くのであって、下から上に書くのではない。横の棒は左から右に書くのであって、右から左へ書くのではない。そういった自然の流れを教えるに止めるのである。

## IX 漢字教育の無効果論

幼児の漢字教育は成長した時、漢字教育を受けている者も受けていないものも、全く同じになるから、漢字教育は効果がないとする主張がある。

そういう人たちの考え方の根本には、幼児教育は遊ぶことが基本であるという固定観念がある。知育など幼児時代にしなくても、大きくなれば同じになるのだという願いがある。だから漢字教育の場合も、幼児時代の教育は効果がないと考えたいのである。

然し社会は変って来ている。進んできている。子供の環境は変化している。子供の知能を刺激し、花開かせるものがいくつも出て来ている。子供は刺激を受け入れ、適応して進んでいく。人間というものは、自分の能力が出来た時、それを試してみたいくなる。子供は殊にそうである。だから子供の知能を刺激する必要があると考える。

そしてそれは早教育でなく、適期教育であると考えます。私たちが音感教育を幼児に行なった時、それは早教育でなく、適期教育であると主張したと同様に、<sup>24</sup> 幼児の漢字教育も早教育でなく、適期教育であると主張する。

さて漢字教育無効果論であるが、私はその研究の方法論が誤っていると思う。幼児の時漢字教育を受けたものと受けないものが、一年生の時はどれだけ違っているか。その違いが2年生、3年生と上級学年にいくに従って差が無くなり、遂に同じになる傾向がある。だから幼児の漢字教育は効果がないと主張する。

これは当然そうなる筈である。幼児で漢字教育を受けた者と受けない者とは、小学一年生では大きな差がある。それらのものが、同じ教育を受けるのだから、段々差が無くなっていく。遂には全く同じになるのは当然である。同じようにしようとしているのだから当たり前である。

幼児で漢字教育を受けたものが、それを土台にして文字教育を受けた場合と、小学一年生になって初めて文字教育を受けた者とは、例えば6年たってどうなるかを比較しなければ、本当の結論は出ないと思う。ところが現状は小学校と幼稚園の教育は断絶している。折角幼稚園で素晴らしい芽を出していても、小学校ではそれを伸ばそうとする努力をしない。小学校の教育が本当であると思いついた考え方が小学校側にある限り、どうにもならない。またそういう教育を受けていない者の方がより多く来るのだから、小学校ではどうにもならないこともよく理解できる。この問題は現在比較して結論の出せるものでないと思う。それなのに結論を出したところに、漢字教育無効果論は間違っていると考える。

小学校の教育と幼稚園の教育とが断絶しているから、直接漢字教育の効果は測定できないが、

次の話はその実証の一つになるのではあるまいか。

父親は放送局のディレクター。その男の子が東幼稚園で漢字教育をするなどとは、間違っていると思っていた。ところがよく本を読む。小学校の低学年で難しい辞書を買ってくれという。買ってどうせ読まないだろうと思っていたが、よく読んで広い知識をもつに到って、父親は今さら漢字教育の効果に驚いたと、漢字教育の発案者が私であることを知らずに、私にいった。

漢字教育の主張者石井勲氏も、大阪朝日新聞の「ひと」という囲み記事の中で、「わが子を自慢するのは気がひけるが、小さいうちから成績がよかった。それも漢字教育のせいだと思っています」とか、「早稲田の中国文学を出た娘は、私の3倍ぐらいの速さで本を読む。最初から漢字で育った世代には、いくら努力してもかないません」といっておる。<sup>24</sup> また昭和59年4月27日の高松東幼稚園に於ける講演の中で、息子さんの読書速度が早かったこと、現在原子力関係の優秀な技術者になっていることなど話された。<sup>25</sup> これらは漢字教育の有効性の傍証になると思う。

次の論は漢字教育無効果論に直につながるものではないが、一宮女子短期大学の三神助教授は、「早過ぎる文字指導は、かえって読解力は伸びない」という。これはワークブックによって文字指導（平仮名）を受けている園児と、文字指導を受けていない園児に、読書レディネステストを行なって比較したものである。文字指導を受けている方が、読書レディネステストの結果ではすぐれているが、5歳児になると逆転する。だから早い文字指導は考えものであるという。<sup>26</sup>

だが文字学習を受ける幼稚園とは、3歳児の2学期より文字指導、4才からはワークブックで一斉指導されるグループであり、文字学習を受けない幼稚園とは、子供の要求、興味にそって文字に親しませるグループをいうのだそうだから、文字指導を受けない幼稚園として後者を考えるのは、大いに問題があると思う。三神助教授のいう通りだとしても、それは文字教育を受けたものと、受けないものとの差ではなく、強制的に文字指導されたグループと、子供の要求、興味にそって文字に親ませるグループの差であって、文字指導を早くやるやらないかの差でなく、どういう形で文字に親ませるかの方法論の差となってしまう。だから私たちのように、遊びの中で子供の興味、関心を起こさせ乍ら知らない間に、漢字を覚えさせる方法と差がなくなってしまう。

私も前述したように、読書レディネステストは実施していた。園児で小学生3年生のレディネスがあるとされた子供も少なくなかったが、そういう子は漢字もよく知っていた。そして読書レディネスと漢字を知っている数つまり漢字を覚えようとする意力とは正比例していた。

## X 今後の漢字教育の問題点

石井勲氏は、平仮名は漢字教育においては、漢字の「てにをは」として教えると自然に覚えてしまうという。<sup>28</sup> 幼児は平仮名を早く覚えるものもいるし、覚えられないものもいる。遅く覚えるものも、覚える時は自然に急速に覚える。幼稚園教育を了える年の正月頃である。カルタ取りが、動機になっていることが多いだろう。

ワープロは平仮名で言葉をうち出す。もちろん漢字を識別できなければならない。ワープロの普及度にもよるが、平仮名をいつどのように覚えさせよかは、漢字教育の一つの問題点であると思う。

幼児にももちろん個人差がある。能力にも、意力でのる時期にも、興味、関心の度合においてもそうである。だから個人差を考えて、ある程度の幅の狭い差のものを、グループにする必要が

ある。このグループ別は、現場においては、却くよう実行できない。能力別学習は、父兄の反対を恐れてようしない。然し差のあるものを、一つのグループにすることは、おちこぼれとはいえないにしても、劣等感を植えつけ、後々の発達の可能性に悪い影響を及ぼすだろうと、私は考える。また能力のあるものを、低い所に停滞させて、やる気をなくする恐れもあると思うのだが。

漢字教育には、ルビ付きの漢字も必要でないかと考える。勿論幼児に対してでなく、可なり読書のできるようになった者のためである。漢字を知る範囲が広がるだろうし、普通必要としない漢字の領域を決めるにも、役立つのではないだろうか。今日問題になっている中国人名、韓国人名の呼称にも便利であると思う。

漢字を教える場合、自然の山から山という漢字になるとか、川の自然の流れから川という字の出来る映画とか、ビデオテープを見せる視聴覚教材を用いることも必要であろう。漢字はた易く覚えられるという外国人のように、漢字を科学的に分解することも必要であろう。

以上要するに現在の幼稚園児は、漢字教育をうけるレディネスが十分に出来ているものが多いと思う。また漢字が平仮名より必らずしも難しいものでなく、容易に覚えられること、漢字教育が小学校の低学年よりも幼稚園児において受け入れ易いという実験結果からして、<sup>29)</sup> 早教育としてでなく適期教育として望ましいと思う。ただ漢字は字数が多いので必要な字、教える順序、漢字の字数については十分検討しなければならない。もちろん行きすぎは戒めなければならない。現代の普通の文化に、現在の普通の子供に必要な漢字教育はすべきでないとする。

建築だって土台から作っていく。基礎の幼稚園教育を無視して、土台のない家の方が主流だとして、日進月歩の今の世に、百年も前の明治19年に決めたやり方を、基準だとして固執する人たちを、笑いたくなる私は間違っているのだろうか。

終りに資料は沢山あるのだが、整理する時間も意力もなく、体験的な論述になったことをお話し下さい。

#### (注)

- 1) 藤岡恭平氏もその著幼児の文字指導の中で主張している。朝日ジャーナル昭和49年8月23日74頁。就学前の文字教育について。
- 2) 昭和44年3月12日大阪朝日新聞、読み書き並行か分離か。国語審議会で漢字教育論争。東京朝日新聞では昭和44年3月11日12版14面、読み優先か読み書き並行か。記事内容は同じ。
- 3) 昭和44年2月9日四国新聞。大阪文化幼稚園の宮地武久事務長の話。  
後日のことになるが、昭和56年4月12日大阪朝日新聞第10面に、卒園までに幼稚園児が1000字読むようになった例をあげている。
- 4) 昭和52年2月14日朝日新聞
- 5) 昭和52年2月28日朝日新聞
- 6) 小学校で石井式漢字教育をしている日本で唯一つの学校がある。島根県斐川町立出頭小学校である。昭和46年頃からである。昭和52年大阪朝日新聞。
- 7) 高松東幼稚園20年史63頁



- 8) このこととは別に石井氏はアメリカ人の書く文章に綴字の誤りが多いと書いている。石井勲の漢字教室 I, 私の漢字教室16頁。
- 9) 石井勲の漢字教室 I, 私の漢字教室69頁～72頁, 80頁。
- 10) 同上書, 17頁, 31頁, 52頁, 189頁
- 11) 昭和44年大阪朝日新聞, こどもと漢字の覚え方。昭和56年12月20日大阪朝日新聞第10面, 漢文読ませる幼稚園。石井勲の漢字教室 I, 私の漢字教室 243 頁
- 12) 水口芳明 抽象的態度と具体的態度の検査に関する心理学的研究 V11.5. 棒検査 510 頁～527 頁。
- 13) 高松東幼稚園20年史63頁, 石井勲の漢字教室 I, 私の漢字教室97頁。
- 14) 角川漢字学習辞典 191 頁～215 頁。
- 15) 高松幼稚園10年史 文字教育について66頁。
- 16) 高松東幼稚園20年史64頁。
- 17) 高松東幼稚園20年史64頁。
- 18) 昭和44年2月9日四国新聞第8面。  
なお, 高松東幼稚園には, 昭和44年からの漢字教育日誌が残っている。
- 19) 高松東幼稚園20年史63頁, 69頁。
- 20) 同89頁, 石井勲の漢字教室 I, 私の漢字教室 250 頁。
- 21) 昭和56年12月20日大阪朝日新聞第10面漢文読ませる幼稚園。
- 22) 高松東幼稚園20年史64頁。
- 23) 昭和58年大阪朝日新聞に漢字は早く教えようの中に, 学年別漢字配当表は996字を, どの字は何年生で教えるかを文部省が決めたものである。だが小林調査官は, 「そんなところまで, 学習指導要領は教師をしぼっていない。漢字配当表では妹は2年で, 姉は4年で教えることになっているが, 2年で妹を教える時に, 姉を平仮名で押し通すのはむしろ不自然ではないか。「あね」とはこんな字であるを書いてみせる方が素直だし, その時の姉のイメージが4年になって姉をキチンと習う時に生きてくるかもしれない。漢字配当表は目安であり, 教育的配慮さえ加えれば発達段階に応じて柔軟な指導をしてほしい。私のいっていることは方向転換でも何でもなく, 言葉の自然な習得のしかただと思う」といっている。
- 24) 高松東幼稚園20年史91頁。
- 25) 大阪朝日新聞 昭和58年「ひと」漢字教育の欠点をただそうと全国行脚に乗り出す石井勲さんという記事の中にある。
- 26) 昭和59年4月27日高松東幼稚園における石井勲氏の講演収録テープ。
- 27) 昭和49年の大阪朝日新聞の早過ぎる文字指導に警告。  
昭和49年5月18日19日に島根大学で開催された日本保育学会第27回大会研究発表論文集 1-509
- 28) 昭和44年7月9日高松東幼稚園における石井勲先生の講演に対し, 平仮名はどのように教えるべきかという質問に対し, 平仮名は漢字の「てにをは」として自然に覚えさせると石井氏は答えた。
- 29) 石井勲の漢字教室 I, 私の漢字教室 243 頁

## 参考資料

- 国立国語研究所『小学校低学年の読み書き能力』秀英出版社 昭和31年
- 西尾実『文字教育』朝倉書店 昭和33年
- 金田一春彦『日本語』岩波書店 昭和22年
- 高橋徹次『漢字漢語談義』大修館 昭和41年
- 藤堂明保『漢字の起源』徳間書店 昭和41年
- 加藤常賢『漢字の起源』
- 石井勲『私の漢字教室』嶺明社 昭和36年
- 石井勲『石井方式漢字の覚え方』
- 石井勲『石井方式漢字の教え方』—3歳児から6年生までの指導法— 学燈社 昭和44年
- 石井勲『石井式漢字教育革命』—幼児でも自然に身につくラクラク学習法— グリーンアロー出版社
- 石井勲の漢字教室 全五巻 『第一巻 私の漢字教室』  
『第二巻 漢字による才能開発』  
『第三巻 石井方式・漢字の教え方』  
『第四巻 親こそ最良の教師』  
『第五巻 漢字は生きている』
- 石井勲 別冊 母と子の実践教室 『第1巻 子どもはみな神童』
- 石井勲 別冊『第3巻 楽しく遊ぶ漢字カード』
- 『漢字の絵本 全6巻』学習研究社
- 『漢字の絵本 第1冊～第10冊』
- 漢字カード  
レコード付 漢字の絵本
- 石井勲『漢字の絵本1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8』幼文社
- 藤田恭平『幼児の文字指導』三省堂
- 白川静『漢字』岩波書店
- 大野晋『日本語をさかのぼる』岩波書店
- 小松茂美『かな—その成立と変遷』岩波書店
- 『当用漢字の学習』浜島書店
- 山田勝美『漢字の起源』角川書店
- 渡辺茂『漢字と図形』日本放送出版協会
- 福沢周亮『漢字の読字学習』学燈社
- 宮地武久『石井方式漢字教育法、かなの教え方、漢字はやさしい。』
- 北日本新聞 昭和44年2月10日『幼稚園でも漢字教育』
- 週刊朝日『漢字で教育する幼稚園』

<Summary>

A New Approach to Teaching 'kanji' to Young Children

Yoshiaki Mizuguchi

After the Meiji era, the principle when learning 'kanji' was to learn reading and writing simultaneously. But over the years a new theory of reading and writing was introduced and developed, whereby they were learnt separately.

Learning 'hiragana' first and 'kanji' later has been our educational policy up until now. Mr. Ishii, an authority on 'kanji', however, maintains that 'kanji' should be learned before 'hiragana' and that even small children can learn characters easily in this way.

In view of this, Takamatsu Higashi Kindergarten is teaching 'kanji' prior to 'hiragana' to its pupils. It is hoped that this new approach will enable the children to learn 'kanji' with ease.

高松短期大学研究紀要

第 15 号

昭和60年3月15日 印刷

昭和59年3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960  
TEL (0878)41-3255

印刷 高東印刷株式会社  
高松市東山崎町596番地